

〔報 告〕

子育て期のひとり親家族の家族機能と認知的ソーシャルサポート

平谷 優子¹⁾ 法橋 尚宏¹⁾

要 旨

子育て期のひとり親家族は、親の役割負担が過剰となり、家族機能を良好に維持することが難しい。ソーシャルサポートは親の育児負担感を軽減することが可能であるので、ソーシャルサポートの認知は、家族機能に影響を及ぼすと考えられる。本研究の目的は、子育て期のひとり親家族の家族機能とソーシャルサポートの認知を定量し、ソーシャルサポートの認知が家族機能に及ぼす影響を量的に明らかにすることである。

“Feetham家族機能調査日本語版 I” (FFFS-J) と“未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール” (SSPS-P) を用いた自記式質問紙調査を実施し、ひとり親家族の母親53名とふたり親家族の母親310名のデータを比較した。家族機能では、“家族と家族員との関係”の分野において、ひとり親家族のほうが有意に充足度が低かった。ソーシャルサポートは、ひとり親家族とふたり親家族に有意差が認められなかった。重回帰分析を行った結果、ひとり親家族の家族機能へは、身内の評価的サポートの認知が影響していた。以上より、看護職者がひとり親のこの種類のサポートの認知を高めることは、ひとり親家族の家族機能の良好な維持につながる可能性が示唆された。

キーワード：ひとり親家族、家族機能、ソーシャルサポート、FFFS-J, SSPS-P

1. はじめに

離婚率の上昇に伴い増加しているひとり親家族は、経済的問題や健康問題、情緒的なストレスを抱えやすいことが指摘されている (Friedman, Bowden, Jones, 2003; McGrath, Yeung, Bedi, 2002; Roth, Simanello, 2004)。特に、こどもの養育や教育に多くの時間を費やす子育て期においては、親にかかる役割負担が過剰となり、家族機能を良好に維持することが難しい (平谷, 法橋, 2009; Hiratani, Hohashi, 2010)。一方で、ソーシャルサポートは、子育てをする母親の適応を促し (Kiehi, White, 2003)、養育行動やその情緒的側面を支援し (Cronin, 2003)、育児負担感や育児不安を軽くして (海老原, 秦野, 2004)、育児ストレスを軽減する (吉永, 岸本, 2007) ため、

必要な時にソーシャルサポートが得られるという認知は、家族機能に影響を及ぼすと考えられる。

ひとり親家族の家族機能に焦点を当てた先行研究 (平谷, 法橋, 2009; Hiratani, Hohashi, 2010; Cowell, Fogg, Ailey et al., 2007; Youngblut, Singer, Madigan et al., 1998) は少ない (平谷, 法橋, 2008) が、家族を取り囲む外部の人的・物的・社会的環境と家族との相互作用を考慮したエコロジカルな視点から家族を包括的に捉え、支援する必要性が示唆されている。ひとり親家族のソーシャルサポートに焦点を当てた先行研究 (荒牧, 2005) によると、ふたり親では配偶者からのサポートが重要であるが、ひとり親ではきょうだいからのサポートが重要であることが明らかにされている。しかし、きょうだいからの、どのようなサポートが重要であるかといったサポートの種類やソーシャルサポートの認知が家族機能に及ぼす影響については明らかにされていない。

1) 神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野 (家族支援 CNS コース)

そこで、家族エコロジカルモデル (Bronfenbrenner, 1979; Roberts, Feetham, 1982) にもとづいて作成された家族機能評価尺度である Feetham 家族機能調査日本語版 I (FFFS-J) (法橋, 前田, 杉下, 2000) と未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) (平谷, 法橋, 2013) を用いた質問紙調査を子育て期のひとり親家族とふたり親家族を対象に実施した。これにより、子育て期のひとり親家族の家族機能とソーシャルサポートの特徴、ソーシャルサポートの認知が家族機能に及ぼす影響を量的に明らかにし、家族支援に役立てることを本研究の目的とした。

II. 研究方法

1. 用語の操作的定義

「家族」とは家族であると相互に認知し合っているひとの小集団システムとし (Hohashi, Honda, 2012), 「子育て期家族」とは、18歳以下の第1子がいる家族とする。「子育て期のひとり親家族」とは、配偶者 (婚姻関係の有無を問わない) のいない親と18歳以下の第1子がいる家族とする。「家族機能」とは、家族員の役割行動の履行により生じ、家族が家族員および社会に対して果たしている働き (Hohashi, Honda, 2012) とする。「ソーシャルサポート」とは、情緒的支持、手段的支持、情報的支持、評価的支持のうち、少なくとも1つ以上を含む個人間の相互作用が支援的な性質をもつと本人によって認められたものとする (平谷, 法橋, 2013)。

2. 質問紙の構成

1) 家族の基本属性に関する質問紙

家族の基本属性に関する自記式質問紙は、ひとり親家族に関する文献検討 (平谷, 法橋, 2008) と半構成面接調査の結果 (平谷, 法橋, 2009) を参考に作成した。質問項目は、家族構成、家族員の年齢、疾患をもつ家族員の有無、家族員の職業の有無、学歴、年収とした。加えて、ひとり親家族には

ひとり親になった期間を設問した。

2) Feetham 家族機能調査日本語版 I (FFFS-J)

FFFS-Jは、家族エコロジカルモデル (Bronfenbrenner, 1979; Roberts, Feetham, 1982) にもとづいて開発された家族機能尺度の日本語版であり、家族機能の充足度を客観的に評価できる尺度である。子育て期の家族を対象として信頼性と妥当性が確認されており (法橋他, 2000; 法橋, 本田, 平谷他, 2008), ひとり親家族に対しても使用可能であることが報告されている (Hiratani, Hohashi, 2010; Cowell et al., 2007; Youngblut et al., 1998; 法橋他, 2000; 法橋他, 2008)。25項目の回答選択肢型で構成される自記式質問紙であり、親子や夫婦関係を測定する「家族と家族員との関係」(10項目)、知人や身内などのように家族と相互関係の強い人々との関係や活動を測定する「家族とサブシステムとの関係」(8項目)、学校や職場などの居宅外での家族員の活動を測定する「家族と社会との関係」(6項目)の3分野を網羅している (25項目中1項目はいずれの分野にも属さない)。各項目には、それぞれ「a. 現在どの程度ありますか」「b. どの程度あると望ましいですか」「c. あなたにとってどの程度重要ですか」という質問がある。これらに対して、1 (ほとんどない)~7 (たくさんある) のリッカート・スケールで回答するようになっており、それぞれを現実 (a 得点)、理想 (b 得点)、価値 (c 得点) とする (得点の範囲は1~7点)。さらに、現実の家族機能と理想の家族機能の差異から家族機能充足度得点 (d 得点 = |a 得点 - b 得点|) を算出できる (得点の範囲は0~6点)。d 得点は高いほど家族機能の充足度が低いこと、c 得点は高いほど重要度が高いことを示す (法橋他, 2000; 法橋他, 2008)。

なお、FFFS-Jには配偶者に関する項目が含まれるが、ひとり親がこれらの項目に回答する際には、配偶者の役割をどの程度必要としているかをもとにして回答する (Hiratani, Hohashi, 2010)。

本研究では、各項目の素点、分野別の項目平均得点 (各分野のd得点もしくはc得点の合計をその分

野の項目数で割った値), 全項目 (25項目) の項目平均得点 (全項目のd得点もしくはc得点の合計をその項目数で割った値) を統計解析に供した。

3) 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P)

SSPS-Pは, ①情緒的サポート (一緒にいて楽しい, わかり合える, 信頼し合える, 安心できるなどの感情的な手助け), ②手段的サポート (家事・育児を手伝ってくれる, お金や物を貸してくれるなどの実際的な手助け), ③情動的サポート (必要な情報を与えてくれるなどの情報提供的な手助け), ④評価的サポート (自分の意見に賛成してくれる, 自分を高くかってくれるなどの評価的な手助け) の4種類のサポートに関して, 7種類のサポーター (「配偶者」「身内 (配偶者を含まない)」「友人・知人」「近所のひと」「仕事仲間」「保育士・教員」「医療関係者」) から「どの程度サポートを受けることが可能と思うか」というサポートの認知を評価する尺度であり, 28項目の回答選択肢型質問で構成される。サポートの認知の程度を1 (ほとんどない)~5 (たくさんある) のリッカート・スケールで回答し, それぞれ1~5点として得点化する。得点は高いほどサポートの認知が高いことを示す。SSPS-Pは, サポートの種類別の得点, サポーター別の得点, トータルサポートスコア (全28項目の合計) を算出できる。なお, サポーターが存在しない場合でも回答できるようにサポーターの存在の有無について問う欄が設けてあり, 存在しない場合は, 4項目をそれぞれ1と回答する。7種類のサポーター以外に支えになるひとを自由に記載する欄も設けてあるが, これは得点化に影響しない (平谷, 法橋, 2013)。

本研究ではひとり親家族を対象とするため「配偶者」に関する4項目を除外した, 24項目の素点, サポーター別の項目平均得点 (サポーター別に合計した値をサポートの種類の数で割った値), トータルサポートスコアの項目平均得点 (全項目の合計をその項目数で割った値) を統計解析に供した。

3. 研究対象と調査方法

ひとり親家族の全世帯に占める割合 (国立社会保障・人口問題研究所, 2005) が, 現在・将来推計ともに全国平均と近似している県で調査を実施した。ひとり親家族は都市部に居住し (由井, 矢野, 2000), 保育所を利用していることが多い (富田, 田辺, 1991) ので, この県の2大都市の保育所を対象とした。

この2市の保育所 (141箇所) のリストから38箇所をランダムに選択した。各保育所の運営者に質問紙を確認してもらい, 研究の趣旨や内容, 意義について説明し, 調査への協力を依頼した。調査への協力・同意が得られた15箇所の保育所にこどもを通所させている合計768家族 (父親と母親の数は不詳) を対象とした。

保育士を通して質問紙一式 (調査への依頼状, 家族の基本属性に関する質問紙, FFFS-J, SSPS-P, 薄謝, 回答返信用封筒) を配布した。自宅にて, ひとり親家族の場合はひとり親, ふたり親家族の場合は両親に回答してもらった。質問紙の回収方法は保育所の希望に応じて決定し, 郵送にて返送してもらうか, 保育所内に設置した回収ボックスにて回収した。

本研究は, 大学の倫理委員会の承認を得たうえで実施した。対象者には, 研究の目的と方法, 匿名性の保持, 回答を拒否したり参加を辞退する権利の保障などについて書面で説明し, 同意が得られた場合のみ質問紙に回答・返却してもらった。質問紙はすべて無記名とし, 個人が特定できないように配慮した。

4. データの集計と解析

統計解析は, Windowsパソコン上の統計解析ソフトウェアSPSS 18.0 (エス・ピー・エス・エス株式会社) を使用した。質問紙の全項目が無記入の場合と子育て期以外の家族の場合は, 無効回答として解析から除外した。

有意水準は5%未満とし, 対応のない2群の比較にはMann-Whitney U 検定を行った。分割表の検定には, Pearsonの χ^2 検定またはFisherの正確検定を行った。多変量データの解析は重回帰分析 (ス

表1. 回答者の基本属性

		ひとり親 (n = 53)	ふたり親 (n = 310)				
		n (%)	n (%)				
家族形態***	核家族	39 (73.6)	275 (88.7)				
	拡大家族	13 (24.5)	21 (6.8)				
家族周期	養育期	40 (75.5)	217 (70.0)				
	教育期	13 (24.5)	89 (28.7)				
疾患をもつ家族員の有無	いる	14 (26.4)	92 (29.7)				
	いない	38 (71.7)	204 (65.8)				
職業の有無	有職	51 (96.2)	288 (92.9)				
	無職	1 (1.9)	14 (4.5)				
学歴***	中学もしくは高校卒業	28 (52.8)	82 (27.1)				
	専門学校卒業から大学院修了	25 (47.2)	221 (72.9)				
		平均	標準偏差	範囲	平均	標準偏差	範囲
年齢(歳)*		32.5	5.2	23~43	34.1	4.4	21~45
同居家族員数***		2.7	0.9	1~6	3.9	0.9	1~8
こどもの数***		1.4	0.6	1~3	1.8	0.7	1~5
第一子の年齢		4.8	2.5	1~13	5.0	2.9	0~14
有職者数***		1.2	0.5	1~3	2.0	0.4	0~4
世帯年収(万円)***		307.1	248.5	11~1200	648.3	354.9	21~2750
ひとり親となった期間(月)		36.8	27.6	2~144			

*p<0.05, ***p<0.001 (Pearsonのχ²検定またはFisherの正確検定, Mann-Whitney U検定).

テップワイズ法)により検討した.

III. 結果

1. 家族の基本属性と解析対象

379家族から質問紙の返却があり、家族数でみた回収率は49.3%であった。その内訳は、ひとり親家族は57名(父親4名, 母親53名), ふたり親家族は577名(父親261名, 母親316名), 配偶者の有無が不明なひとは6名であった。本研究では、ひとり親家族の父親の回答者数が少ないため父親を除外し、有効回答の得られた、ひとり親家族の母親53名, ふたり親家族の母親310名を解析対象とした。

ひとり親家族とふたり親家族の基本属性を表1に示した。家族周期, 疾患をもつ家族員の有無, 職業の有無, 第1子の年齢については、ひとり親家族とふたり親家族で有意差は認められなかった。ふたり親家族よりもひとり親家族のほうが、拡大家族の割合が高く、学歴では中学もしくは高校卒業の割合が高く、回答者の年齢が若く、同居家族員数が少なく、こどもの数が少なく、有職者数が少なく、年収が少

表2. Cronbachのα係数

質問紙	ひとり親 (n = 53)	ふたり親 (n = 310)
FFFS-Jのd得点(25項目)	0.83	0.81
家族と家族員との関係(10項目)	0.85	0.75
家族とサブシステムとの関係(8項目)	0.72	0.59
家族と社会との関係(6項目)	0.54	0.57
FFFS-Jのc得点(25項目)	0.90	0.86
家族と家族員との関係(10項目)	0.86	0.81
家族とサブシステムとの関係(8項目)	0.76	0.72
家族と社会との関係(6項目)	0.76	0.79
SSPS-Pのトータルサポートスコア(24項目)	0.84	0.86
友人・知人のサポート(4項目)	0.86	0.79
近所の人のサポート(4項目)	0.93	0.91
仕事仲間のサポート(4項目)	0.83	0.85
保育士・教員のサポート(4項目)	0.85	0.79
医療関係者のサポート(4項目)	0.76	0.77

なかった(これらすべてに有意差が認められた)。ひとり親となった期間は平均36.8か月であった。

2. FFFS-Jの家族機能得点と重要度得点

Cronbachのα係数は、表2に示した。

25項目別のd得点とc得点を表3に示した。d得点をひとり親家族とふたり親家族で比較すると、9項目に有意差が認められた。このうち、「3. 配偶者と過ごす時間」「4. 配偶者に関心事や心配事を相談すること」「7. 育児や家事などに対する配偶者の協

表3. FFFS-Jのd得点とc得点のひとり親家族とふたり親家族の比較

項目番号	回答選択肢質問の内容 (分野)	d得点 平均 (標準偏差)	c得点 平均 (標準偏差)
1	知人に関心事や心配事を相談すること (II)	0.8 (1.2)	4.6 (2.0)
2	身内に関心事や心配事を相談すること (II)	0.8 (1.0)	4.6 (1.5)
3	配偶者と過ごす時間 (I)	0.8 (1.1)	4.9 (1.7)
4	配偶者に関心事や心配事を相談すること (I)	2.3 (2.2)]** 1.3 (1.5)]**	5.1 (1.6)
5	近所の人と過ごす時間	3.4 (2.3)]*** 2.2 (2.3)]*** 0.7 (1.2)]***	5.5 (1.4)]*** 3.2 (2.3)]*** 5.7 (1.5)]***
6	余暇や娯楽の時間 (I)	1.3 (1.3)	3.0 (1.5)
7	育児や家事などに対する配偶者の協力 (I)	1.3 (1.2)	3.2 (1.4)
8	育児や家事などに対する身内の協力 (II)	1.8 (1.6)	5.0 (1.7)
9	医療機関にかかったり、健康相談を受けること (II)	2.1 (1.5)	5.0 (1.4)
10	育児や家事などに対する知人の協力 (II)	2.3 (2.1)]** 1.3 (1.4)]**	3.5 (2.3)]*** 5.6 (1.4)]***
11	子どもに関する心配事 (II)	1.1 (1.3)	5.3 (1.9)]*
12	子どもと過ごす時間 (I)	1.1 (1.2)	4.7 (1.8)]*
13	子どもが保育所・幼稚園・学校を休むこと (III)	1.2 (1.5)	3.9 (2.1)]*
14	配偶者との意見の対立 (I)	1.4 (1.6)	4.6 (1.8)]*
15	体調が悪いこと (III)	0.8 (1.1)	3.2 (1.8)]*
16	家事をする時間 (I)	0.7 (1.0)	2.5 (1.6)]*
17	仕事(家事)を休むこと (III)	1.5 (1.6)	4.9 (2.1)
18	配偶者が仕事(家事)を休むこと (III)	1.5 (1.6)	5.3 (1.8)
19	知人からの精神的サポート (II)	1.8 (1.6)	6.0 (1.2)
20	身内からの精神的サポート (II)	1.5 (1.5)	6.2 (1.0)
21	配偶者からの精神的サポート (I)	0.6 (0.8)	4.6 (2.3)
22	日課(家事)が邪魔されること (III)	0.7 (1.1)	4.5 (2.1)
23	配偶者の日課(家事)が邪魔されること (III)	0.6 (1.1)]** 1.2 (1.4)]**	2.2 (1.9)]*** 4.5 (1.9)]***
24	結婚生活に対する満足感 (I)	1.6 (1.9)	4.6 (2.5)
25	性生活に対する満足感 (I)	1.9 (1.8)	5.1 (2.1)
		1.6 (1.6)	5.1 (1.5)
		1.6 (1.4)	5.2 (1.4)
		0.9 (1.3)]*	5.1 (2.0)
		1.4 (1.5)]*	5.0 (1.7)
		0.5 (1.2)]** 1.0 (1.4)]**	2.6 (2.3)]*** 4.7 (2.0)]***
		0.9 (1.3)	4.3 (2.0)
		0.7 (1.0)	4.4 (1.9)
		1.2 (1.7)	5.2 (1.9)
		0.7 (1.2)	5.1 (1.8)
		2.5 (2.7)]* 1.1 (1.5)]*	3.4 (2.6)]*** 5.8 (1.5)]***
		1.9 (1.9)	4.3 (2.1)
		1.5 (1.6)	4.3 (1.8)
		0.6 (1.3)	2.5 (2.1)]** 0.7 (1.2)
		2.7 (2.4)]** 1.2 (1.5)]**	3.3 (1.8)]** 3.6 (2.5)]*** 5.8 (1.4)]***
		2.2 (2.2)]** 1.0 (1.4)]**	3.0 (2.1)]* 3.8 (1.8)]*

上段：ひとり親家族 ($n = 53$), 下段：ふたり親家族 ($n = 310$). I：家族と家族員との関係, II：家族とサブシステムとの関係, III：家族と社会との関係. * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$ (Mann-Whitney U 検定).

力」「21. 配偶者からの精神的サポート」「24. 結婚生活に対する満足感」「25. 性生活に対する満足感」の6項目は、ひとり親家族のほうがふたり親家族よりも有意に高得点であった。すなわち、ひとり親家族の家族機能の充足度が低かった。この6項目はす

べて配偶者に関する項目であった。c得点をひとり親家族とふたり親家族で比較すると、12項目に有意差が認められた。このうち、「8. 育児や家事などに対する身内の協力」「10. 育児や家事などに対する知人の協力」の2項目は、ひとり親家族のほうが

表4. FFFS-Jの項目平均d得点・C得点におけるひとり親家族とふたり親家族の比較

分野	項目平均d得点 平均 (標準偏差)	項目平均c得点 平均 (標準偏差)
家族と家族員との関係 (10項目)	1.85 (1.22)]*	4.12 (1.33)]***
	1.31 (0.78)]*	5.32 (0.89)]***
家族とサブシステムとの関係 (8項目)	1.03 (0.78)	4.55 (1.17)
	0.95 (0.64)	4.54 (1.00)
家族と社会との関係 (6項目)	1.04 (0.78)	4.05 (1.45)]*
	1.21 (0.82)	4.48 (1.33)]*
全項目 (25項目)	1.38 (0.77)	4.17 (1.09)]***
	1.17 (0.58)	4.79 (0.81)]***

上段：ひとり親家族 (n = 53), 下段：ふたり親家族 (n = 310). *p<0.05, ***p<0.001 (Mann-Whitney U検定).

表5. SSPS-Pのサポート得点におけるひとり親家族とふたり親家族の比較

	平均 (標準偏差)				
	情緒的サポート	手段的サポート	情動的サポート	評価的サポート	サポーター別
身内	3.7 (1.3)	3.7 (1.4)	3.6 (1.2)	3.6 (1.3)	3.7 (1.1)
	3.8 (1.1)	3.7 (1.2)	3.5 (1.1)	3.7 (1.0)	3.7 (0.9)
友人・知人	3.7 (1.3)	2.4 (1.5)	3.6 (1.1)	3.4 (1.2)	3.3 (1.1)
	3.7 (1.0)	2.2 (1.1)	3.4 (1.0)	3.4 (1.0)	3.2 (0.8)
近所の人	1.9 (1.2)	1.7 (1.2)	2.1 (1.3)	1.9 (1.2)	1.9 (1.1)
	2.0 (1.1)	1.5 (0.9)	2.1 (1.1)	1.9 (1.0)	1.9 (0.9)
仕事仲間	3.1 (1.1)	2.1 (1.3)	3.4 (1.2)]*	3.2 (1.2)	3.0 (1.0)]*
	2.8 (1.1)	1.9 (1.0)	2.9 (1.2)]*	2.9 (1.1)	2.6 (0.9)]*
保育士・教員	2.9 (1.1)	2.8 (1.4)	3.1 (1.2)	2.6 (1.1)	2.9 (1.0)
	3.0 (0.9)	2.9 (1.3)	3.4 (1.0)	2.9 (0.9)	3.0 (0.8)
医療関係者	2.1 (1.1)]**	1.8 (1.1)	2.6 (1.2)]**	1.8 (0.9)]**	2.1 (0.9)]**
	2.7 (1.1)]**	1.8 (1.1)	3.2 (1.2)]**	2.4 (1.0)]**	2.5 (0.8)]**

上段：ひとり親家族 (n = 53), 下段：ふたり親家族 (n = 310). *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001 (Mann-Whitney U検定).

ふたり親家族よりも有意に高得点であった。その他の10項目はひとり親家族よりもふたり親家族のほうが有意に高得点であり、このうち、9項目は配偶者に関する項目であった。

分野別の項目平均d得点、全項目の項目平均d得点、分野別の項目平均c得点、全項目の項目平均c得点を表4に示した。3分野別にひとり親家族とふたり親家族を比較すると、“家族と家族員との関係”の項目平均d得点はひとり親家族のほうが有意に高く、“家族と家族員との関係”“家族と社会との関係”の項目平均c得点はふたり親家族のほうが有意に高かった。全項目 (25項目) の項目平均d得点はひとり親家族とふたり親家族で有意差は認められず、全項目の項目平均c得点はふたり親家族のほうが有意に高かった。

3. SSPS-Pのサポートスコア

Cronbachのα係数は、表2に示した。

24項目別、サポーター別の得点を表5に示した。サポーター別にひとり親家族とふたり親家族を比較すると、医療関係者からのサポートの認知はふたり親家族のほうが有意に高く、仕事仲間からのサポートの認知はひとり親家族のほうが有意に高かった。なお、トータルサポートスコアに有意差は認められなかった。

4. ソーシャルサポートがひとり親家族の家族機能に及ぼす影響

ひとり親家族に限定して、24項目のサポート得点を独立変数とし、家族機能充足度得点を従属変数として重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った結果を表6に示した。ひとり親家族の家族機能へは、身内の評価的サポートの認知が影響しており、身内の評価的サポートの認知が高いほど家族機能の充足度が高かった (調整済みR²=0.11)。

なお、ひとり親家族のサポーターについて、

表6. ソーシャルサポートがひとり親家族の家族機能に及ぼす影響 (N = 53)

従属変数	独立変数	β	p-value
家族機能充足度得点	身内の評価的サポート	-0.35	0.01
調整済みR ²		0.11	0.01

投入した独立変数：身内の情緒的サポート、身内の手段的サポート、身内の情動的サポート、身内の評価的サポート、友人・知人の情緒的サポート、友人・知人の手段的サポート、友人・知人の情動的サポート、友人・知人の評価的サポート、近所の人の情緒的サポート、近所の人の手段的サポート、近所の人の情動的サポート、近所の人の評価的サポート、仕事仲間の情緒的サポート、仕事仲間の手段的サポート、仕事仲間の情動的サポート、仕事仲間の評価的サポート、保育士・教員の情緒的サポート、保育士・教員的手段的サポート、保育士・教員の情動的サポート、保育士・教員の評価的サポート、医療関係者の情緒的サポート、医療関係者の手段的サポート、医療関係者の情動的サポート、医療関係者の評価的サポート。

SPSS-Pの7種類のサポーター以外に支えになるひとがいるか確認したところ、11.3%の母親が「恋人」を、7.5%の母親が「元夫」をサポーターとして認識していた。

IV. 考 察

1. ひとり親家族の家族機能の特徴

ひとり親家族の家族機能は“家族と家族員との関係”の分野において、ふたり親家族と比較して、有意に充足度が低下していたが、この結果は配偶者に関する項目の家族機能が低下していることに起因していた。ただし、ひとり親家族は、配偶者がいるにも関わらず“家族と家族員との関係”の分野の家族機能の充足度が低い場合とは異なり、配偶者がいないために未充足であるため、重要度もふたり親家族と比較して低いことが明らかになった。ひとり親がFFFS-Jの配偶者に関する項目に回答する際には、配偶者の役割をどの程度必要としているかをもとにして回答する (Hiratani, Hohashi, 2010) ため、充足度が低いという結果から、ひとり親家族の中には配偶者の役割を必要としている家族がいる可能性も考えられる。実際に、11.3%の母親が「恋人」を、7.5%の母親が「元夫」をサポーターとして認識していた。これは、離婚を経験した未成年のこどもの

いる母親への面接調査の結果とも一致しており、母親は再婚や恋愛関係の中で良いパートナーを見つきたい気持ちがある (家計経済研究所, 1999) ことが指摘されている。本研究対象のひとり親は、ひとり親となって平均36.9か月が経過しているため、結婚や元夫に対するネガティブな感情が薄らいでいる可能性があることも配偶者に関する項目が未充足である原因の一つとして考えられる。一方で、異性との交際がこどもに及ぼす影響などを考慮して異性との交際を抑止している (平谷, 法橋, 2009) 家族がいることも明らかにされており、家族のありようは多様であるため、臨地で本研究結果を活用する際には、家族差を考慮する必要がある。

2. ひとり親家族のソーシャルサポートの特徴

ひとり親家族のソーシャルサポートの認知は、仕事仲間からは、ひとり親家族のほうが高く、就業率が高いひとり親家族の母親は、ふたり親家族の母親以上に仕事仲間からのサポートを認知していることが明らかになった。医療関係者からのサポートの認知はふたり親家族のほうが高いが、ひとり親家族は医療機関を適切に受診していないことが多いことが指摘されており (McGrath et al., 2002; 平谷, 法橋, 2009), 医療関係者と接触する機会が少ない可能性が考えられる。しかし、ひとりで働きながらこどもを育てるにあたり、仕事や環境に合わせて社会資源を利用できることは重要であり (荒川, 2003), 必要な時に専門的なネットワークを利用できること、保持していることは問題解決の側面のみならず、こどもの行動に関するストレス、社会的孤立に対するストレスとも関連していることが明らかにされている (園部, 白川, 廣瀬他, 2006)。したがって、医療関係者から必要な時に育児支援が得られると家族が認知できるよう、医療関係者が地域において積極的に子育て支援を行うことが望まれる。特に、看護師は医療機関を受診しない家族にも電話やインターネットなどを通じて、家族が安価で気軽に育児相談や健康相談ができるような環境を構築し、家族支援を実践する必要がある。

3. ソーシャルサポートが家族機能に及ぼす影響と家族支援

重回帰分析の結果、ひとり親家族の家族機能へは身内の評価的サポートが影響していた。調整済み R^2 の値は高いほど望ましいが、本研究では0.11であった。家族機能へは、ソーシャルサポートの他に、家族の健康状態や性別、ライフサイクル、社交性、ストレスなどの様々な要因が影響している(Hiratani, Hohashi, 2010; Chung, 1990; Wright, 2006)。したがって、限られた条件でこのような種類の変数を予測する際、高い値の調整済み R^2 が得られることは非現実的である(DeMaris, 2004)と言われている。本研究において、身内の評価的サポートの認知だけで家族機能の11%を説明できたことは意味があると考えられるが、調整済み R^2 の値が低く、家族機能への影響要因として抽出されたのはソーシャルサポートの1変数のみのため、「恋人」や「元夫」などのSSPS-Pの項目以外のソーシャルサポートが家族機能に影響している可能性も考えられる。

先行研究では、ひとり親家族は身内からの支援が重要であることが明らかにされている(荒牧, 2005)が、本研究の結果より、身内のサポートの中でも家族機能に影響しているのは評価的サポートであることがわかった。離婚を経験した養育期のひとり親家族を対象とした先行研究では、ひとり親家族は、離婚後に身内と同居するなどして身内から家事や育児支援が得られる場合でも、家族の将来を見据えて、家族内対処が可能になるよう自立に向けて努力していた(平谷, 法橋, 2009)。特に、本研究対象のひとり親家族は離婚直後のひとり親家族が少ないため、家族内で維持できない機能を補完すること以上に、ひとり親家族が家族機能を向上して自立できるよう、身内が家族を認め、支える支援が重要であると考えられる。なお、評価的サポートが重要なことは、子育て期にある母親の心理的健康が周囲からの評価と関連していることを明らかにした研究論文(田熊, 伊藤, 2008)の結果からも裏付けられる。

V. 本研究の限界

本研究では、ひとり親家族の父親の回答者数が少ないため、父親を除外して解析を行っており、ひとり親家族の家族機能とソーシャルサポートとして調査結果を一般化するには限界がある。また、決定係数の値が低く、影響要因として抽出されたのはソーシャルサポートの1変数のみであるため、今後は、家族数を増やして更なる検討を重ね、研究を発展させたい。

VI. 結論

子育て期のひとり親家族の家族機能とソーシャルサポートの認知、ソーシャルサポートの認知が家族機能に及ぼす影響を明らかにするためにFFFS-JとSSPS-Pを用いた質問紙調査を実施した。ふたり親家族と比較して、ひとり親家族の家族機能の充足度は低かったが、ソーシャルサポートの認知に差はなかった。先行研究より、ひとり親家族では身内のサポートが重要であることが明らかにされていたが、本研究において身内のサポートの中でも家族機能に影響しているのは評価的サポートであることがわかった。看護職者が母親のこの種類のサポートの認知を高めることは、ひとり親家族の家族機能の良好な維持につながる可能性が示唆された。

謝辞

貴重な時間を費やし、質問紙調査にご協力くださいました対象者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました保育園の先生方に深謝いたします。

{ 受付 '13.11.21 }
{ 採用 '14.06.26 }

文献

- 荒川てるえ：シングルマザー，Perinatal care, 夏季増刊：222-225, 2003
荒牧美佐子：育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—，

- 小児保健研究, 64(6) : 737-744, 2005
- Bronfenbrenner, U. : The ecology of human development, Experiments by nature and design, Harvard University Press, Cambridge, MA, 1979
- Chung, Y. S. : Analysis of factors affecting family function, *Kanho Hakhoe Chi*, 20(1) : 5-15, 1990
- Cowell, J. M., Fogg, L., Ailey, S. et al: Family functioning among single and partnered Mexican immigrant women, 8th International Family Nursing Conference BOOK OF ABSTRACTS, 124, 2007
- Cronin, C. : First-time mothers : Identifying their needs, perceptions and experiences, *Jornal of Clinical Nursing*, 12 : 260-267, 2003
- DeMaris, A. : Simple linear regression, In A. DeMaris (Ed.), *Regression with social data: Modeling continuous and limited response variables (1st ed.)*, 38-78, John Wiley & Sons, Hoboken, NJ, 2004
- 海老原亜弥, 秦野悦子 : 保育園・幼稚園を育てる母親の育児負担感—ストレス—, コーピング, ソーシャル・サポートの関係—, *小児保健研究*, 63(6) : 660-666, 2004
- Friedman, M. M., Bowden, V. R., Jones, E. G. : *Family nursing: Research, theory, and practice (5th ed.)*, Prentice Hall, Upper Saddle River, NJ, 2003
- 平谷優子, 法橋尚宏 : ひとり親家族に関する国内文献の動向と看護学研究の課題, *家族看護学研究*, 13(3) : 165-172, 2008
- 平谷優子, 法橋尚宏 : 離婚を経験した養育期のひとり親家族の家族機能と家族支援, *家族看護学研究*, 15(2) : 88-98, 2009
- Hiratani, Y., Hohashi, N. : Family functions of child-rearing single-parent families in Japan: A comparison between single-parent families and pair-matched two-parent families, *Japanese Journal of Research in Family Nursing*, 16(2) : 56-70, 2010
- 平谷優子, 法橋尚宏 : 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers: SSPS-P) の開発とその有効性の検討, *家族看護学研究*, 19(1) : 2-11, 2013
- 法橋尚宏, 本田順子, 平谷優子他 : 家族機能のアセスメント法—FFFS日本語版 I の手引き—, EDITEX, 東京, 2008
- Hohashi, N., Honda, J. : Development and testing of the Survey of Family Environment (SFE) : A novel instrument to measure family functioning and needs for family support, *Journal of Nursing Measurement*, 20(3) : 212-229, 2012
- 法橋尚宏, 前田美穂, 杉下知子 : FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版 I の開発とその有効性の検討, *家族看護学研究*, 6(1) : 2-10, 2000
- 家計経済研究所 : ワンペアレント・ファミリー (離別母子世帯) に関する6カ国調査, 大蔵省印刷局, 東京, 1999
- Kiehl, E. M., White, M. A. : Maternal adaptation during childbearing in Norway, Sweden and United States, *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 17 : 96-103, 2003
- 国立社会保障・人口問題研究所 : 日本の世帯数の将来推計 (都道府県別推計)—2000 (平成12) 年~2025 (平成37) 年—, 国立社会保障, 人口問題研究所, 東京, 2005
- McGrath, C., Yeung, C. Y., Bedi, R. : Are single mothers in Britain failing to monitor their oral health?, *Postgraduate Medical Journal*, 78 : 229-232, 2002
- Roberts, C.S., Feetham, S. L. : Assessing family functioning across three areas of relationships, *Nursing Research*, 31(4) : 231-235, 1982
- Roth, P., Simanello, M. A. : Family health promotion during transitions, In P. J. Bomar (Ed.), *Promoting health in families: Applying family research and theory to nursing practice (3rd ed.)*, 477-506, Saunders, Philadelphia, PA, 2004.
- 園部真美, 白川園子, 廣瀬たい子他 : 母親の社会的ネットワークと母子相互作用, 子どもの発達, 育児ストレスに関する研究, *小児保健研究*, 65(3) : 405-414, 2006
- 田熊昭江, 伊藤裕子 : 多重役割に従事する女性の心理的健康—子育て期と中年期を対象に—, *文京学院大学人間学部研究紀要*, 10(1) : 121-135, 2008
- 富田恵子, 田辺敦子 : ひとり親家庭の現状, (田辺敦子, 富田恵子, 萩原康生編集), *ひとり親家庭の子どもたち : その実態とソーシャル・サポート・ネットワークを求めて*, 1-49, 川島書店, 東京, 1991
- Wright, R. : Social support and health outcomes in a multi-cultural urban population, *Social Work in Health Care*, 43(4) : 15-28, 2006
- 吉永茂美, 岸本長代 : 乳児を持つ母親の育児ストレス—, ソーシャル・サポートとストレス反応との関連—初産婦と経産婦の比較から—, *小児保健研究*, 66(6) : 767-772, 2007
- Youngblut, J. M., Singer, L.T., Madigan, E. A. et al : Maternal employment and parent-child relationships in single-parent families of low-birth-weight preschools, *Nursing Research*, 47(2) : 114-121, 1998
- 由井義通, 矢野桂司 : 東京都におけるひとり親世帯の住宅問題, *地理科学*, 55(2) : 77-98, 2000

Family Functioning and Perceived Social Support Among Child-rearing Single-parent Families

Yuko Hiratani¹⁾ Naohiro Hohashi¹⁾

1) Division of Family Health Care Nursing, Kobe University Graduate School of Health Sciences (Certified Nurse Specialist [CNS] in Family Health Nursing Program)

Key words: Single-parent family, Family functioning, Social support, FFFS-J, SSPS-P

In many cases of child-rearing single-parent families, one parent bears excessive burdens, thereby making it difficult to maintain good family functioning. Because social support can reduce child-care stress, it is believed that perceived social support may have some influence on family functioning. The aim of this study was to quantify the family functioning and perceived social support among child-rearing single-parent families, and to determine the effects of perceived social support on family functioning quantitatively.

A self-administered questionnaire survey was conducted using Japanese-language Version I of the Feetham Family Functioning Survey (FFFS-J) and the Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers (SSPS-P). Data collected from 53 single mothers were compared with 310 mothers of two-parent families. According to their responses, it was found that single-parent families have lower family functioning in the area of "relationship between family and family members." In comparisons of perceived social support, significant differences were not found between two-parent families and single-parent families. As the result of the stepwise multiple linear regression analysis, family functioning of single-parent families were affected by relatives' appraisal support. Therefore nursing professionals might be able to improve family functioning of single-parent families by promoting the mother's perception for these forms of support.